

スウェーデンの季節と行事に見る生活と文化

藤田 雅子

Swedish Life and Culture from the Viewpoint of Seasons and annual Events

Masako Fujita

Sweden is a long country from Lappland to Skåne. Traditional cultures are various. Here I mainly discuss about the life and the culture in Stockholm and its neighborhoods.

New Year, Easter, the spring bonfire, May Day, Midsummer, crayfish party, All Saints, Advent, Lucia and Christmas. These seasonal events are popular in Sweden. Traditional culture is not only a reflection of geographical features but also a product of outside influences. Germanic, Russian and English influences have remained in Sweden. The social setting for the traditions are changing through the life and the seasons.

This country has transformed from an old-fashioned agrarian society to a modern industrial nation. Tax payment by self-assessment, the academic calendar, the government budget, the election and the Nobel prize's conferment. These modern events are also woven into the traditions.

はじめに：スウェーデンの年中行事に見る生活と文化

北欧5カ国のひとつスウェーデンは、44万km²に884万人が住み、人口密度は20人/km²と、きわめて低い。北緯55度20分から69度4分、南北

1,574km、東西499kmと緯度が高く、南北に長く、北部は北極圏である。この小論では、季節感は首都ストックホルムを中心に述べる。季節と行事を追うと、スウェーデンの生活と文化が見えてくる。文中では、行事名など必要と考えられる箇所にはスウェーデン語の綴りと、発音に近い片仮名を付けた。語源の意味も説明するように努めている。なお使用する写真は、すべて私が撮影した。

I 冬（ヴィンテル vinter）：新年、冬本番

1 新年そしてクリスマス行事の終了

スウェーデンの新年（ニイオーシュ・ダーゲン Nyårsdagen）は、大晦日の夜11時過ぎに町の人々が集まり、新年を待つ集いに始まる。「春の詩」が朗読され、地元の政治家がスピーチをし、音楽の披露などがあり、年が変わる寸前に、10、9、8とカウントダウンし、3、2、1と数え終わる同時に「新年おめでとう（ゴット・ニット・オール Gott Nytt År）」の声を掛け合う。打ち上げ花火が上げられ、夜空を冬の華々が彩る。

極寒の北極圏キルナ（Kiruna）では、雪の白さと夜空の藍色に花火が映えた。写真1は、その鉾山の町キルナの新年で、雪の中に「新年おめでとう」の文字が見える。元旦は国民の休日である。

クリスマスから数えて13日目の1月6日は、トレットンダーグス・ジュール（Trettondags jul）と呼ばれ、毎年休日である。これでクリスマスの行事は全て終了し、子どもたちの冬休みも終わり、1月7日から学校が始まる。気温も低く、凍てつき、日照時間は極端に短く（北極圏では太陽が上らない日々が続く）、天候もすぐれない日が多い。



写真1 北極圏の町キルナ。鉱山を背景に「新年おめでとう」の字が浮かぶ

2 スポーツ週間と国家予算の発表

2月中旬から3月中旬（第7週から第10週）に渡って、1週間のスポーツ週間（スポーツ・ローヴ sportlov）がある。全国を4分割して順ぐりに休暇を取るのので、スキー場などが混雑することはない。一段と冬の厳しさが増すが、徐々に昼間の時間が延びてくるので、明るくなってきた分だけ気分的には軽くなる。

3月中旬を過ぎても「暑さ寒さも彼岸まで」というわけにはいかず、日照時間は急激に延びてくるが、空気はピーンと張り詰め、冬のままである。太陽が照っても、暖かさはまったくない。それなのに3月最後の日曜日には、もう夏時間になる。目を覚ましたら腕時計、目覚し時計、家中の時計を全て1時間進める。夏時間（ソンマル・ティデン sommartiden）は、冬の気配が濃厚になる10月末まで7カ月間も続く。

毎年4月15日に、政府は国家予算（スターツ・ブジェット statsbudgetet）を発表する。7月1日から始まる新会計年度の予算である。

II 春（ヴォール vår）：復活祭から本格的な春へ

3 復活祭と「春」

待ちに待った行事が、復活祭（ポスクデーゲン Påskdagen）である。人々は「ポスク」とだけ呼ぶ。ポスクは春分の日を越した満月直後の日曜日が当てられる。復活祭の行事そのものは、キリストの死後100年後から続くという説がある。

ポスクの頃は、野や山は冬枯れのままであるが、待ちに待った「春」である。2日前の金曜日がロング・フレーダーグ（Långfredag）という休日で、復活祭の次の日が、ポスクの次の日という意味のアンナダーグ・ポスク（Annandag Påsk）で休日であるから、4日間の連休となる。復活祭の日は年によって違ってくる。



写真2 魔女スタイルの子どもたちが
春を呼ぶ復活祭「ポスク」

ポスクのずいぶん前から、芽の固い白樺の小枝に、赤、黄、青、緑、紫などに着色された羽根を結びつけた「ポスクの小枝（ポスク・リース påskris）」が花屋の店頭を飾る。室内は暖かいので、復活祭の頃には可愛い新芽を出す。黄色い水仙や黄色いヒヨコの飾りが彩りを添える。卵型の紙容器にお菓子を詰めて、子どもにプレゼントする風習がある。

ヨーロッパ各地に魔女伝説が残るが、スウェーデンも例外ではない。空想の世界の魔女と、魔女裁判の実話が入り乱れているようであるが、魔女の人形がポスクの頃には、ショーウィンドウなどを飾る。人形だけ

ではない。ポスク・シャーリング (påsk kärring) と呼ぶ、幼い少女の魔女スタイルが目を引く (写真2)。ロングスカートををはき、エプロンをかけ、三角形のスカーフで頭を包み、顔にはそばかすを描く化粧をし、魔女に扮した少女たちが、籠、ヤカン、ガラスのポットなどに「ポスクおめでとう」と書いた紙切れを入れて、家々を回って、お小遣いをもらって歩く風習が残る。

復活祭を過ぎれば、北欧にも間もなく遅い春がやってくる。

4 春を呼ぶ「マイ・ブラーサ」と国王の誕生日

本格的な春を呼ぶのは、4月30日の夕刻から始まるヴァールボリイ (Valborg) で、雄大な炎が夜空を焦がす。点火される前に、年配の男性が昔の大学生の帽子に軽いコート姿で、若い時代に戻った気分で、コーラス「春の歌」を披露するのが恒例である。日本の寮歌祭を連想する雰囲気である。

夜が明けると5月。春本番で、長い冬の出口、人々が待ち焦がれた太陽の季節の入口である。このヴァールボリイは「5月の焚き火 (マイ・ブラーサ Majbrasa)」と呼ばれるが、焚き火などという可愛らしいものではなく、数千人が「マイ・ブラーサ」を囲むのも珍しくない。海や湖の水辺が、「焚き火」の場所となる (写真3)。キリスト教以前の「春の祭り」に由来するという。スウェーデンの暦は1年365日がそれぞれ人名をもっているが、ヴァールボリイは、4月30日の名前である。この「焚き火」はドイツの影響を受けているらしい。ポスクに続き魔女が飛び交う。魔女に春を持っていかれないように火を焚くとか。

なぜか「春」に魔女が登場する。

4月30日は、国王カール・グスタフ16世 (Karl XVI Gustaf) の誕生日である。国民の祝日ではない。1999年4月30日で53才になられた

国王は、国民の象徴的存在である。ご一家はストックホルムの宮殿ではなく、郊外のドロットニングホルム（Drottningholm）にある離宮を居城とされる。



写真3 「マイ・ブラーサ」に点火。本格的な春がおとずれる

5 メーデーと税金の確定申告

5月の初旬に寒の戻りがあるかもしれないが、春爛漫である。草木は一斉に眠りから覚め、花が咲き、人々は冬のコートも重いブーツも脱ぐ。冬枯れから緑へと数日で景色が一変する。5月1日はフォーシュタ・マイ（Första maj）と呼ぶ。1日（フォーシュタ）と5月（マイ）をくっつけただけであるが、特別な日である。労働者の祭典メーデーで国民の休日になっている。写真4は、社会民主党系のメーデーを写した。

稼働年齢の80%以上が労働組合（ファック・フォーレニング fack förening）に加入し、世界的にも高い組織率である。ブルーカラーの組合（LO）とホワイトカラーの組合（TCOとSACO）のいずれにか属する。労働組合は、支持政党の社会民主党や左派政党と共に、メーデー

の集会や街頭デモなどを繰り広げる。しかし年々、人数は縮小し、昔を知る人々からすると、隔世の感があるという。



写真4 フォーシュタ・マイと呼ばれるメーデー(社会民主党系集会)

スウェーデンといえば、高い税金(スカット skatt)をイメージする人もいるくらいである。その税金の確定申告の期限が5月の第1月曜日である。最終日が近づくと税務署(スカット・ヒュセツト skatthuset)近辺はフィーバーし、露天のソーセージ屋が出たり賑やかである。郵送すれば済む申告用紙を、わざわざ届けに来る人も多い。中央税務署は最終日は時間を延長して、午前零時まで受付け、車で申告用紙を出しに来た人から窓越しに手渡しで受け取る職員まで配置する。

よほどの金持ちでない限り、人々は所得の30%ほどを所得税として納めることになり、これは地方自治体に入り、義務教育、社会福祉、地方交通、環境保全、余暇活動、図書館などの文化活動、消防などの市民の安全といった市民生活に使用される。日本の市レベルに当たるコミュニティの収入の62%は所得税である(1997年の全国平均)。

ちなみに消費税は内税法式の25%である。しかし食料品は(写真5)

は、12%に押さえられている。消費税は、国庫収入の23%を占める(98年)。

5月中旬に「昇天祭(クリスティ・ヒンメルス・フェードスダーグ Kristi himmelfärdsdag)」、下旬の日曜日に「聖霊降臨祭(ピングスト・ダーゲン Pingstdagen)」があり、いずれもキリスト教に関する行事で、休日である。



写真5 食料品は税率を低く押さえている。大型スーパーMMのレジ

Ⅲ 夏(ソンマル sommar): 短い夏と長いバカンス

6 万物が「生」を謳歌する夏

春は駆け足で通り抜け、すぐに夏。6月は1年でもっとも昼間の時間が長く、夜の時間は極端に短くなる。ストックホルムでも天気がよければ、夜の11時でも外で本が読めるし、午前3時には朝の光がまぶしい。6月6日はスウェーデンの建国記念日で国旗の日でもあるが、祝日にはなっていない。国旗の使い方の手引き(Viktigt att veta om din svenska flagga)があるほど、国旗を身近に使う国民である。ブルー

の地に黄色の横長十字の国旗は、祝日はもちろん、湖や海の大小の船、家のベランダや公園などに飾られる。

6月上旬のストックホルム・マラソンの頃は、人々はバカンスの準備で気もそぞろである。野の花も、木々の花も一斉に咲き誇り、小鳥は美しい声を奏でる。学校は6月5日から12日の間に学年末を迎え、夏休み(ソンマル・ローヴ sommarlov)になる。8月中～下旬の新学期まで、長い休みである。大人も年間に5週間の休暇(セメスター semester)が保障されており、多くは夏に4週間ほどは休む。

表1は、夏至の頃の日の出と日の入りの時刻を表わす。夏の太陽は水平線から現れる前から明るさをもたらし、水平線に消えても明るく照らす。表にはないが、北極圏では水平線に沈まないミッドナイトサンが真夜中に輝く。新年から数えて第25週の土曜日は、代表的な祭りである「夏至祭」で国民の休日である。ミッドソンマル・ダーゲン(Midsommardagen)と呼ぶ。夏が最高潮に達する。もともとは6月24日であったが、1953年から6月20日から26日の間で夏至の日の直後の土曜日にしたという。1999年は26日で、あいにく雨模様であったという。私は、残念ながらこの時期にスウェーデンに滞在したことがないので、最大の行事を体験できないでいる。

表1 夏至の頃の日の出と日の入り：白夜のスウェーデン

都 市 名	日 の 出	日 の 入 り
ルレオ Luleå	0 1 : 1 7	2 3 : 5 0
ストックホルム Stockholm	0 3 : 3 3	2 2 : 0 7
ヨーテボリー Göteborg	0 4 : 1 4	2 2 : 1 4
マルメ Malmö	0 4 : 2 6	2 1 : 5 4

資料：新聞 DAGENS NYHETER 1999・6・19

7 古いも若きもバカンスの夏

7月は、スウェーデン全体が夏の休暇の真最中である。多くの人々はセカンドハウスに出かけ、町中の人口はぐっと減少し、閑散としている。最小限の社会、経済活動しかなされていないようである。スーパーやデパートは開いているが、個人経営の商店などは閉めてしまう所が多い。社会福祉関係や病院の職員も数週間の休みを取るので、パートの職員などやり繰りが必要になる。キャンピングカーが行き交い、湖や海にはヨットなど船が、空には気球がのんびりと浮かんでいる（写真6）。



写真6 天気の良い夏の夕刻は、気球が浮かぶ

町に残っている人々も野外で活動する。例えばゴルフ場では、小中学生でもルールを守り、プレーの能力（グリーンカード）があれば大人に混じってプレーできる。その近くの湖では、水浴を楽しんでいる。

行き交う人々は日焼けして、なにしろ真っ黒である。テレビに映るアナウンサー、政治家も国王も日焼けした顔である。だから冷夏にでもなれば、スウェーデン人にとって最悪の事態である。1年間分の太陽を6月中旬から8月中旬までのこの2カ月間で吸収しようというのだから、

大変である。ティショップでは日向を陣取る。公園でいきなり衣服を脱ぐと、下はビキニの水着で、敷物を敷いて寝転び、なるべく広い体表面積を太陽にさらす。写真7は、公園で日光浴を楽しむ人々を撮った。

7月末になると、盛夏が徐々に遠ざかる。



写真7 夏の間、1年中の日光を吸収する

8 夏の終わりの「ザリガニ祭り」と「ウォーターフェスティバル」

夏のバカンスがひと区切りする頃から、野外のコンサートやオペラなどの楽しみがある。夜9時頃まで明るいので、夕方から始まり、終了する頃に夕暮れになる。

8月。町に人々が戻ってくる夏の終わり頃、欠かせないのが、ザリガニである。こんな生物を食するだけでも不思議であるのに、デイル(dill)という香草を入れて塩茹でにしたザリガニをスウェーデン中が愛でる。日本の鮎のように、ザリガニを捕獲できる解禁日が決まっている。しかしスウェーデン産ザリガニを食いつぶしたわけではないだろうが、今では海外から輸入している。ザリガニの病気が集団発生し、死に絶え

たという説もある（資料1）。今では解禁日は、ザリガニを販売できる解禁日になっている。スーパーなど冷凍を含め、ザリガニの売り出しに活気づく。品薄の年の落胆は大きい。

資料1 「スウェーデン人とザリガニ」

8月の黄昏時。青空の下。灯された明かり（ろうそく）。デイルの香り。

深みのある赤い色をしたザリガニに、味の強いチーズとトーストパン、そして飲み物が添えられる、ザリガニ祭りのテーブルを知らないスウェーデン人はいないでしょう。

以前は、スウェーデンでザリガニが捕れました。どの湖でも川でも、黒光りしたザリガニがあふれていました。ところが1907年にフィンランドから持ち込まれたひとかたまりのザリガニがザリガニベストにかかっていた。スウェーデンのザリガニが急激に減り始めました。それ以来、スウェーデンは世界最大のザリガニ輸入国になりました。

アメリカ産、トルコ産、中国産、スペイン産のザリガニが毎年、大量に食べられています。スウェーデン人が一番愛しているザリガニのはずですが、実は外国産なのです。

KONSUM（生協）の広告を引用

「ザリガニ祭り」はクレフト・フィーヴァ（kräftskiva）と呼ぶ。クレフトはザリガニ、フィーヴァはザリガニを盛り付ける皿のことである。ザリガニパーティでは、ナプキンから食器までザリガニ模様、しかも頭に被る紙のピエロ風帽子もヨダレカケ風エプロンにまでザリガニが描かれている。ザリガニは殻や殻など殻の部分が大きくて、身の部分はわずか。殻をチュウチュウと吸い、アルコール度40°ほどの地酒アクアヴィット（aquavit）を飲み、これだけですごく楽しいのである。無邪気そのものである。ザリガニの売り出しで活気づく頃、新聞はザリガニとアクアヴィットの品定めの一覧をこぞって掲載する。ザリガニを食べなければ、夏は終わりにできない。

食糧庁は、輸入ザリガニに病気がないか、細菌に汚染されいないか検疫に忙しい。

ストックホルムでは、ナット・マラトン (nattmaraton) という夜中に走る市民参加型のマラソン大会が催されるのもこの頃 (99年は8月7日) である。土曜日の晩に、ストックホルムっ子数千人がドタドタと市内を駆け抜ける。この大会のために、夏中トレーニングをする人も多い。

8月の上～中旬の10日間に渡るヴァッテン・フェスティヴァーレン (Vattenfestivalen) つまりウォーターフェスティバルが開催される (99年は8月6日～15日)。この夏の締めくくりの行事の頃になると、人々は長い夏の休みを終えて町に戻ってきている。例年、最終日は水上花火が、過ぎ行く夏を惜しみ、夜空を彩った。今は、環境保護の点からやめている。最近は商業主義に傾き、批判を浴び、ストックホルム市の財政を圧迫するなどの理由で、このフェスティバル自体が存亡の危機に直面している。

Ⅳ 秋 (ヘースト höst) : 日に日に、日暮れが早まる

9 8月中旬は新学期、そして労働の再開

学校は8月中旬から6月中旬までが1学年である。基礎学校は、日本の小学校と中学校を合わせたような義務教育の学校で、入学は7才であるが、1年繰り上げる動きがある。表2は、教育について制度を一覧にした。8月下旬ともなると、ピカピカの新1年生が2人1組に列をつくって、先生に引率されて近隣を勉強する姿が目につく。

子どもが学校に戻り、大人が労働を再開始める頃には、林檎も小さな実をつけ、気の早い木々は、紅葉の準備を始める。風は秋である。ストックホルムでも、朝晩は10℃を割ることもある。天気予報は北の地方の雪を伝える。

9月はとくに行事はなく、普通の時間が流れるだけである。

表2 保育・学校教育・成人学校（コミュン管轄の教育）

教育の場	年齢・年限・単位	特 徴
保 育 (保育園)	0～6才	就学前教育としての位置づけ (0才児は親の育児休業の対象)
義務教育 (基礎学校)	9年制	低学年と中学年は日本の小学校に当たる 高学年は日本の中学年に当たる
高等学校	3年制 (4年制もある)	職業準備教育として職業人の教育と 大学進学のための教育を兼ねる
成 人 高等学校	単 位 制	コミュンの昼夜開講の学校 20才以上が対象・人数制限がある 大学進学のための単位を補足 (他に全国レベルの大学入試検定試験制度がある)

10 国会議員と地方自治体議員の総選挙は4年に1度

4年に1度の総選挙（アルメンナ・ヴァール *allmänna val*）の年に当たると、熱気ムンムンである。国民は選挙への関心が高く、90%以上の投票率の年もあった（1994年87%、1998年81%。Sweden in Figures 1999）。投票日は9月の第3日曜日で、選挙の年は、ポスターが張られ、選挙活動の小屋が作られ、9月は賑やかである。国会議員、地方自治体の議員を一度に選挙する。1998年に総選挙があったから、次は2002年になる。

選挙権も被選挙権も18才である。主として政党への投票であるが、最近、個人への投票も可能となった。泡沫政党の悪影響を防ぐために4%未満の政党は全く議席を獲得することができない。スウェーデンの議会には解散はないが、どうしても必要ならば国民投票に持ち込むという方法はあるが、解散はないと考えてよい。

現在の国会議員の政党構成は高い方から、社会民主党、穏健党、左派

政党、キリスト教民主党、中央党（旧農民党）、国民党、環境党の順である。社会民主党の党首はヨーラン・パーション（Göran Persson）で、左派政党に閣外協力を求めている。男女平等が進んでおり、国会議員の女性の率は、前回の94年の選挙で世界記録の40%を達成し、現在は43%が女性である。スウェーデンでは1918年に憲法を改正し、1921年に23才以上の女性に投票権が認められた。日本の元号でいうと大正10年のことである。表3は、国会議員の総数に占める女性議員の率の変化を表わすが、着実に数字を伸ばして、現在に至る。表4は、党派別、男女別に国会議員の議席を示す。地方自治体の議員の半数は女性である。大臣の半数も女性である。

選挙の年は、選挙や組閣の後日談も賑やかである。98年には、事実婚（籍を入れない結婚形態で法的に認められる）をしていて子どものいる大蔵大臣の男性と、伝統的結婚をして子どものいる教育大臣の女性が、実は男女の関係にあること、日本流の表現では不倫の関係にあることが分かりマスコミを騒がせた。政治と私生活は別という考えもあったようだが、教育大臣が退いた。

表3 国会議員に占める女性の率

年	(%)
1922	1.3
32	1.1
42	5
52	9
62	12
70	13
73	19
76	21
79	26
82	27
85	31
88	38
91	33
94	※40
98	43

※ 世界記録

資料：Kvinnor i riksdagen
RIKSDAGENS FAKTABLAD Nr8
1998

表 4 国会議員の政党別・男女別構成（1998年総選挙）

(略号)	政 党	女 性	男 性	計
(S)	社会民主党 SOCIALDEMOKRATERNA	65	66	131
(M)	穏健党 MODERATA SAMLINGSPARTIET	25	57	82
(V)	左派政党 VÄNSTERPARTIET	18	25	43
(K d S)	キリスト教民主党 KRISTDEMOKRATERNA	17	25	42
(C)	中央党 CENTERPARTIET	10	8	18
(F p)	国民党 FOLKPARTIET LIBERALERNA	6	11	17
(M p)	緑の環境党 MILJÖPARTIET DE GRÖNA	8	8	16
	計	149	200	349

資料：Sveriges riksdag 1998

11 晩秋の墓参

10月になると、秋の日はつるべ落としである。早ければストックホルムでも小雪がちらつく。近くまで冬がやってきている。10月の最終日曜日に夏時間（ソンマル・ティデン sommartiden）が終わる。秋が深まった季節に夏時間が終わるというのも不思議であるが、3月末に1時間進めた家中の時計をなにしろ全部、1時間戻してやる。

10月末～11月初旬の第44週の土曜日は「全聖人の日」である。アッ

ラ・ヘルゴンス・ダーグ (Alla helgons dag) と呼ばれ、国民の休日である。死者は全て聖人になるらしい。日本の「盆」と「彼岸」を合わせたような雰囲気、南墓地 (スコグス・シルコ・ゴードン skogskyrkogarden) には墓参りの人が訪れ、蠟燭、花、リースを供える。スコグは「森」、シルコは「教会の」、ゴードンは「敷地」「庭」を意味し、墓 (グラヴgrav) の集合体を表す。教会所属の墓地を除けば、ストックホルムには北と南に大きな墓地があり、ストックホルム市民はいずれは北か南の墓地に入る。南墓地の花屋では、「死神」と「魔女」のスタイルの男女が、商売に精を出していた (写真8)。

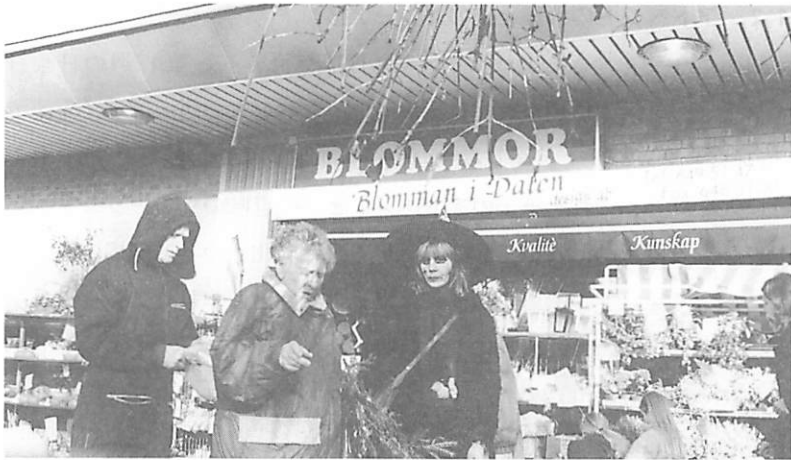


写真8 高度に組織化されても、墓地は精神的拠り所

スウェーデンでは火葬が90%で、最近では散骨も増加しているという (DN 7月29日)。往年のハリウッド女優グレータ・ガルボ (Greta Garbo 1905~1990年) の墓が、紆余曲折があったが南墓地に完成したと新聞 (DN 7月) が大きく報じた。墓地は心の拠り所でもある。

最後までへばり付いていた木の葉が、墓参りの人々にハラハラと振りかかる。北欧の晩秋は死者を想うにふさわしい。教会では鎮魂歌 (レクイ

エム)のコンサートが開催され、死者を悼む。86年に路上で暗殺された故パルメ首相(Olof Palme)が眠るアードルフ・フレデリック教会(Adolf Fredriks Kyrka)でも、毎年「全聖人の日」の夕刻からレクウィエムのコンサートが開催される。

寒波が襲来し、冬木立ちになる。本格的な厳しい冬の訪れが間近である。「全聖人の日」が終わると、ますます日照時間は少なくなり、夜明けは遅く、夕暮れは早くなる。

V クリスマス(ジュール jul): 暗い冬とクリスマス

1 2 アドベントの蠟燭と光のルシーア祭

11月の中旬を過ぎると、クリスマス行事が始まる。第47週の日曜日からアドベントの蠟燭がお目見えする。アドベントの語源はドイツ語で「待降祭」を意味する。同じ高さの蠟燭を4本並べて、端っこの1本だけに火を灯し、これを第1のアドベントという意味のフォーシュタ・アドベント(fösta advent)と呼ぶ。暗く冷たい北欧の冬に蠟燭の炎は優しい温もりを灯す。次の2週間目には、1本目と2本目(アンドラ・アドベント andra advent)に、3週間目は3本目(トレディエ・アドベント tredje advent)まで灯す。クリスマスを心待ちにする気持ちがアドベントの蠟燭に託されている。

第4週の日曜日には4本全部に火を灯し(フィヤーデ・アドベント fjärde advent)、4本の蠟燭がお行儀よく傾斜すると、次の週はクリスマスである。現在ではすでに傾斜させて山形に並んだランプ式のアドベントが売られており、本物の蠟燭を使うのは教会くらいである。アドベントの蠟燭(電気)はスウェーデンを限無く、窓辺を飾る。

クリスマス前の行事で忘れられないのは、12月13日のルシーア祭 Luciafestである。ルシーアは「光の女神」で、ナポリ民謡「サンタ・ル

チーア」の「ルチーア」はこの「ルシーア」に通じる。早朝、ルシーアに扮した少女が、白いロングドレスに赤いリボンの腰紐を結び、頭に数本の蠟燭を冠風に立て（現在は電池式）、ルッセブッレード（lussebröd サフラン入りのパン）やペッパーカーカ（pepparkakaジンジャークッキー）を、お父さんやお母さん、学校の先生に届ける風習が残る。保育園、学校、職場でも「ルシーア」ごっこが行われるという。スウェーデンの歌と信じる「サンクタ・ルシーア」のメロディを口ずさみながら、ルシアの行列が進む。

ルシーア祭は、1927年に新聞“Stockholmstidningen”（現在は廃刊）が「ルシア」を公募した時に始まり、普及していった。ルシーア（ルチーア）は304年に死去し、聖人となったイタリア女性の名前である。北欧の暗い冬に、一筋の光を求めたのかもしれない。

1 3 ノーベル賞の授賞式

12月に入ると、ノーベル賞の話題でスウェーデンは（世界中が）賑わう。12月10日にコンサートホールで、国王からノーベル賞が授与される。スウェーデンではノベール・ダーゲンNobeldagenと呼ぶ日である。ダイナマイトの発明者アルフレッド・ノベール（Alfred Nobel 1833年生まれ、1896年12月10日死去）の遺言によって1901年から始まった。

現在では、物理学賞と化学賞(1901年より)そして経済学賞（1968年より）は、スウェーデン科学アカデミー（1905年より）が、医学生理学賞はカロリンスカ・インスティテュート（1936年より）が、文学賞はスウェーデン・アカデミー（1900年より）が選考に当たり、最終的には「ノーベル委員会」が決定する。平和賞はノルウェーの国会が任命した委員会で行われるが、ノーベル平和賞が設定された当時はスウェー

デンの統治下にあった（ノルウェーは、1814年にデンマークからスウェーデンに統治が移り、1905年にデンマークから王を迎え、現在に通じる国家体制を整えた）。表5は、これまでのノーベル賞授賞者の部門別人数を表す。

スウェーデン滞在中のノーベル賞の受賞者のもとへ、ルシーアが訪れる習慣がある。名誉な受賞者に会える幸運なルシーアは誰なのか。

表5 ノーベル賞受賞者の人数（1901～1998年）

ノーベル賞	受賞者数
物理学賞	1 5 7
化学賞	1 3 1
生理学・医学賞	1 6 8
文学賞	9 5
平和賞	1 0 5
経済学賞（1968～）	4 3

資料：Alfred Nobel and the Nobel Prizes
Fact Sheets on Sweden
the Swedish Institute 1998 Nov

14 クリスマス jul

クリスマスツリー（ジュール・グラン julgran）で、家の中が華やぐ。午後3時には夜の帳が降り、広場など野外の大きなツリーにつけられた無数の裸電球が寒風に揺れる様は幻想的である。ツリー用の樅の木や、クリスマス用品を売る「クリスマス市」が立ち、暗い冬に彩りを添える（写真9）。山羊がクリスマスプレゼントを運んでくるという言い伝えがあり、藁で作った山羊が真っ赤なりポンを巻きつけて売られる。鉢植えのヒヤシンスも季節の花である。町はクリスマスプレゼントや年末の客で賑わう。



写真9 クリスマス市の賑わいは伝統的

12月に入るとクリスマスディナーの催しが、レストランやホテルである。洒落たところでは、凍てつく雪の道を野外のクリスマスツリーに誘われ、昔の貴族の館に入ると暖かいディナーが待っている（実は予約制）。食後のティーは、貴族の調度品に囲まれ、クリスマスの雰囲気満点である。

賑やかなのは、クリスマス前までである。24日から26日は静寂そのもの、23日で「市」も片付けられる。クリウスイブ（ジュール・アフトン julafton）の24日は、商店は閉まり、人の姿もほとんどなく、前日までの華やかな通りが夢のようである。

12月25日はクリスマスの当日で、スウェーデン語でジュール・ダーゲン Juldagen といい、家族で過ごす。教会のクリスマスのミサに出かけるのは、年配の人がほとんどである。26日はアンナンダーグ・ジュール annandag jul と呼ばれるクリスマス後祭で、休日。知人宅などを訪れるので、人々が町に出てくる。写真10は、スウェーデンの観光地「サンタワールド」で子どもと会話するサンタクロースを撮ったが、北

欧にサンタは似合う。

大晦日（ニイオーシュ・アフトン Nyårsafton）を迎え、1年が暮れる。過ぎた1年を顧みるという習慣はない。花火とともに新年を迎える。



写真10 クリスマスにはサンタクロース

まとめ：スウェーデンの行事と社会

スウェーデンの年中行事を見ると、伝統的、宗教的行事が社会化し、現代社会とミックスしていることに興味を注がれる。森と湖の国のイメージをキャンパス地に、男女平等、税金の高さ、整った社会福祉、能率的な経済活動、信頼できる政治力、これらの要素も描かき込まれた「絵画」になって、社会全体の統一がとれている。

日本と比較してみよう。「子供の日」、「成人の日」、「敬老の日」といった人生の節目を祝う行事はなく、国王の誕生日や国の誕生日も、国民の祝日ではない。スウェーデンは、200年近く前の1809年から憲法（現在の「国家基本法」は1974年）があるが、「憲法記念日」はない。「体育の日」というような休日はないが、クリスマスから復活祭までの間で宗

教行事がない2月から3月にかけて、スポーツ週間がある。子どもも大人もウィンタースポーツに興じる。「みどりの日」や「海の日」など自然に関する行事や休日はないが、森、湖、海など自然環境の保全には常に気を配っている。「勤労感謝の日」はないが、男女ともに働くことが当然の社会において、夏の大型バカンスを楽しみ、徹底した労働時間の効率化を図り、労働と休暇のバランスを上手にとっている。「文化の日」も文化勲章もないが、毎年、ノーベルが死去した12月10日にノーベル賞授与式がコンサートホールで行われる。

スウェーデンは地球の北の端に位置するからだろうが、行事には、太陽と光への憧れが漂う。6月の夏至祭と12月のクリスマスが1年を2分し、これに学校の学年暦、夏の長期休暇や冬のクリスマス休暇、政府の会計年度や税金の申告など、現代生活がうまくはまり込んでいる。高度な制度が生活に仕組まれ、研ぎ澄まされた社会であるスウェーデンに、人間臭さを添えるのが年中行事である。

参考資料

百科事典 FOCUS UPPSLAGSBOK

出版社 ALMQVIST & WIKSELL

新聞 DAGENS NYHETER (文中DNで表示)

EXPRESSEN, Din Kalendar 1999

その他の資料は文中に表示してある